

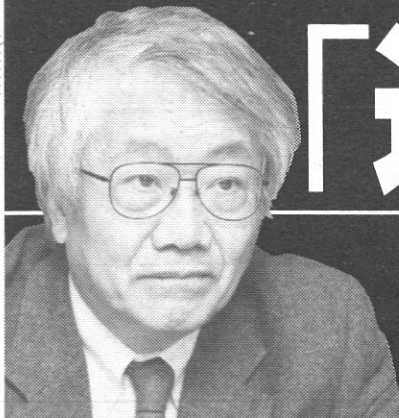
# 週刊文春

11月14日号 定価380円





# 「近藤誠先生、あなたの犠牲者、が出ています」



近藤医師

「明確に、間違っています。私はこれまで沢山の病変を早期で見つけて、早期に処置をしてきました。がんは臓器によって恐ろしく進行の早いものもある。患者さんが、近藤さんの本を読んだ結果、手術が遅れにな

昨年12月の出版以来、売れ続けている

「明後」は間違っています。がんの早期発見は意味がない」という「近藤説」は間違っているとい

「最初」に読んだ時はなかなか面白い表現だと感心しました。悪性度の高いものから低いものまであり、その間には近藤さんの言う「がんもどき」に相当するグループもある。仮に「がんもどき」であっても、いつか本物のがんになる可能性がある」という結論です。

「この患者がもし近藤さんの所に行っていたら、何の処置もしないはずですから半年程度で亡くなっていたでしょう。転移があったのだから近藤さんの言う『がんもどき』ではない。無意味なはずの手術と抗がん剤治療で生存年数が延びた。この事実について近藤さんはどのように語るのですか」

「この患者がもし近藤さんの所に行っていたら、何の処置もしないはずですから半年程度で亡くなっていたでしょう。転移があったのだから近藤さんの言う『がんもどき』ではない。無意味なはずの手術と抗がん剤治療で生存年数が延びた。この事実について近藤さんはどのように語るのですか」

「現代は遺伝子研究も進み、がん医療はオーダーメイド医療に向かっていきます。百人いたら百通りの治療法や薬の処方を考える時代がやってきます。ところが近藤さんは『固形がんは誰でも、全て放置しなさい。がんが死ぬのではなく、手術や抗がん剤で殺されますよ』と言う」

「後出しじゃんけん」もしくは「タラレバ論」です。ゴルフでドライバーを持ってティーショットをしたらOBだった。観ていた評論家が「ほらみる、アイアンを選べば良かったんだ」と言うのと一緒でしょう。

「後出しじゃんけん」もしくは「タラレバ論」です。ゴルフでドライバーを持ってティーショットをしたらOBだった。観ていた評論家が「ほらみる、アイアンを選べば良かったんだ」と言うのと一緒でしょう。

「後出しじゃんけん」もしくは「タラレバ論」です。ゴルフでドライバーを持ってティーショットをしたらOBだった。観ていた評論家が「ほらみる、アイアンを選べば良かったんだ」と言うのと一緒でしょう。

「後出しじゃんけん」もしくは「タラレバ論」です。ゴルフでドライバーを持ってティーショットをしたらOBだった。観ていた評論家が「ほらみる、アイアンを選べば良かったんだ」と言うのと一緒でしょう。

「後出しじゃんけん」もしくは「タラレバ論」です。ゴルフでドライバーを持ってティーショットをしたらOBだった。観ていた評論家が「ほらみる、アイアンを選べば良かったんだ」と言うのと一緒でしょう。

「後出しじゃんけん」もしくは「タラレバ論」です。ゴルフでドライバーを持ってティーショットをしたらOBだった。観ていた評論家が「ほらみる、アイアンを選べば良かったんだ」と言うのと一緒でしょう。



「医療否定本」に殺されないための48の真実

長尾 和宏



100万部 ベストセラー

『医者に殺されない47の心得』に 現役医師が大反論

長尾医師（下）のクリニック（上左）と著書

「医者に殺されない47の心得」（アスコム）という過激なタイトルの本が売れている。昨年十二月に発売されてから版を重ね、今年九月には百万部を突破した。著者は慶應義塾大学医学部専門講師の近藤誠氏（65）。がんの放射線治療が専門だが、従来から安易ながんの手術に警鐘を鳴らしてきた医師だ。この本はそうした主張の集大成ともいえる内容になっている。

## 早期に「前がん病変」を発見しても：

その一方、近藤氏により否定されてきた医療界は、「近藤説」を黙殺、あるいは無視を決め込んできた。しかしここに来て、一人の医師が「反・医療否定論」「反・近藤説」を掲げ、今年八月、一冊の本を上梓した。タイトルは『医療否定本』に殺されないための48の真実（扶桑社）。まさに近藤氏の本にカウンターパンチを入れた格好だ。著者は長尾和宏氏（55）。平成七年に兵庫県尼崎市で

「病院によく行く人ほど本来は不要な薬や治療を施されて早く死ぬ」 「がんの早期発見は無意味。検診や人間ドックはいかない方が長生きできる」 「抗がん剤は毒性が強く、がんには効かない」 「がんは放置するのが最も良い」

## 「後出しじゃんけん」か「タラレバ論」

「後出しじゃんけん」もしくは「タラレバ論」です。ゴルフでドライバーを持ってティーショットをしたらOBだった。観ていた評論家が「ほらみる、アイアンを選べば良かったんだ」と言うのと一緒でしょう。

「がんは『本物のがん』と『がんもどき』に分かれていて、『本物のがん』が見つかった場合は早期発見であっても実はすでに転移が起きているから手術は無意味。『がんもどき』はがん

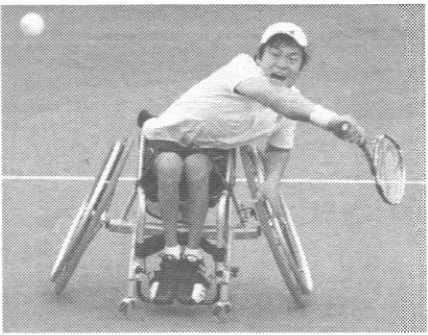
「がんは『本物のがん』と『がんもどき』に分かれていて、『本物のがん』が見つかった場合は早期発見であっても実はすでに転移が起きているから手術は無意味。『がんもどき』はがん



# 首相官邸に イチローからの電話



車いすテニスの最強王者・国枝



世間では二〇二〇年の東京オリンピック、パラリンピックに関心が集中しがちだけど、政治家はもう一つ、大事なことを忘れちゃいけない。折しもキャロライン・ケネディ新駐日米大使の赴任も決まったよね。それは知的障害のある人たちの国際スポーツ組織「スペシャルオリンピックス」さ。故ジョン・F・ケネディ米大統領の妹さんが創設者で、ケネディ家が深く関わってきた。そんな形で社会が置き去りにしがちな人たちを支えているのさ。国際社会では本家の五輪以上。王室や大富豪経営者などもこちらに手を差し伸べるし、認知度も高いぞ。

「ス」がつくのは四年に一度の大会に限らず、年間を通して世界各地で様々なイベントを開くからなんだ。でも、我が国じゃ五輪絡みで宣伝を画策する企業は多いが、スペシャルオリンピックスは一〇〇パーセント、忘れられちゃっているのが実情じゃないかな。ちょっと、おかしくない？ 小泉純一郎元首相は総理在任中の二〇〇五年、長野で開かれた冬季世界大会の開会式に出席し、開会宣言したんだよ。スペシャルオリンピックスの選手やスタッフたち二百人を官邸に招いたのも、歴代で小泉内閣だけだからね。かく言うオレも、姉がマラソンの代表選手を志し、応援を楽しみにしてたんだけど、国内の地区予選であえなく負けちゃってさ……。身内がそんなことだから、陰に陽に色々お手伝いはさせてもらったんだけどね。オリンピックス、パラリンピックの所管は文部科学省。スペシャルオリンピックスは厚生労働省なのよ。内閣官房に五輪推進室ができて、

経産省出身の平田竹男参事が室長になった。文科省や農水省は専任の出向者がいるらしいけど、厚労省はいないっていうんだな。もっと目を向けてほしいね。安倍晋三首相は長期政権間違いなしだ。あわよくば二〇二〇年まで頑張るかも知れないよな。だったら、オリンピックス、パラリンピックに合わせ、スペシャルオリンピックスも一部競技で構わないから東京開催を検討してもらいたいよね。 **「鈴木一朗です」** 今度の五輪招致で宮城県出身で女子走り幅跳びのパラリンピアン、佐藤真海さんの渾身のプレゼン演説が国民の胸を打ったよな。でも、忘れられていると言え、車いすテニスのプロ選手、国枝慎吾さんも、もっと評価してあげなくちゃ。パラリンピックのシングルスでも金メダル二個、ダブルスでも一個取っているんだぞ。おまけに世界の四大大会を制覇する年間グラントスラムだって達成している。世界的な知名度は抜群

だよ。最近では金メダル取ればすぐ国民栄誉賞だ、総理大臣表彰だって時の首相も動くけれど、何で世界最強の国枝さんには何にもしてないのかね？ オレも外国の友人から「イイジマ、何でなの？」って聞かれて弱っちゃうよ。 まあ、国枝さんもメジャーリーグのイチロー選手と同じ理由で「無冠の帝王」なのかも知れないけどね。今だから言うけど、実は小泉首相はイチロー選手に国民栄誉賞を贈ろうとしたことが二度あったんだよな。 官邸で仕事していたら「飯島秘書官、鈴木さんからお電話ですが」って言われて誰だかわかんなくてさ。受話器を取って「どちらの鈴木さんですか？」と聞いたら「鈴木一朗です」って名乗るんだから、参ったよ。「大変名譽なお話ですが、現役の間は賞はいただくわけに参りません」ということで、きっぱりと辞退されたのが真相さ。さすがプロだね。政治家も人気取りはほどほどに、目を向けるべきところに向けて欲しいな。

するならば、医療の本質をも否定することになる」 また、近藤氏のロジックは「一見分かりやすいようだが、根本のところまでこじつけがある」とも指摘する。「今、がん治療研究の最前線では『がん幹細胞』が非常に注目されています。簡単に言うと、がん幹細胞はがんの親分ですが、通常は増殖せずに眠った状態にあります。しかしそこから枝分かれ派生する『子分のがん細胞』はどんどん増殖します。今の抗がん剤は増殖期にある子分には効きますが、休眠期のがん幹細胞には効かない弱点があるんです。だから再びがん細胞が増えてしまう。 そのがん幹細胞について、この春、九州大学で画期的な発見がありました。休眠状態から目覚めさせて抗がん剤で叩く手法を発見したので。これは大きな話題になりました。 一方で近藤さんは転移する本物のがんと、転移しないがんもどきに分かれると言いい、がんもどき理論をがん幹細胞理論と関連づけて

論じています。 しかしがんもどき理論ががん幹細胞理論とどう関係するのか私には全く理解できません。がんの悪性度とがん幹細胞理論の関係性は、まだ解明されていないからです。 しかし長尾氏の主張のように、近藤氏の論理に無理があるのなら、なぜ世論からここまで圧倒的な支持を集めているのだろうか。「今回の本を書いて以来、様々なメディアから『近藤さんと対談して欲しい』という依頼が殺到しています。でもそういった『ハブとマングースの戦い』のような、一過性が見世物をするつもりはないし、メディアの対立構造に乗っても患者が幸せになるとは思いません。 私自身も、近藤さんの説の全てを否定する訳ではありません。半分は同意する部分もあるのです。 例えば、尊厳死・平穏死に関する考え方です。 がん拠点病院の大病院では、『もう治療の段階になり患者』に延命治療をし、

結果的に本人を苦しめることが多い。私はそうした過剰医療には明確に反対の立場ですし、近藤さんも常々同じニュアンスの発言をされています。 抗がん剤治療に関しても、彼は全て無意味と言いつつ、意味がある部分もある、と若干違いますが全肯定できないところも似ています。 「近藤さんがこれほど受け入れられた背景には、世の中に根強い医療不信があるからだと思えます。 抗がん剤治療を受けている患者がクリニックに来た時、私がある抗がん剤について質問すると『よく分からない。苦しいけど医者に言われたからやっている』と話す人がいました。抗がん剤で完治すると思っている人もいます。 医師はともすれば『上から目線』になる。大病院で診察を受けるとパソコンのモニターに体を向けて、患者の目も見ずに話す医師もいます。がん患者に対し

ただ、やはり近藤さんはここにきて意図的に極論を展開しすぎたため、医療現場では混乱が大きくなっています。私は患者さんが現代医学で認められている治療法の中で自分が望み納得する道を選ぶ権利を奪ってはいけません。 そのうえで、長尾氏はこう続けた。 て、本当に寄り添って対話できているのでしょうか。 患者や家族の方からすると、医療はブラックボックスで不親切、不安を取り除いてくれない、裏で特権を利用して悪い事をしていてではないか。 そういうマグマのような妻まじい不信感があって、『医療は不要、医療はウソだらけ』と主張した近藤さんは待ってましたと押し上げられて、カリスマになったのだと思えます。 実際、「反・近藤」の声を上げた長尾氏はネットなどで猛烈なパッシングを受けている。

「医師と患者の間には、深い河」があります。治療をする側とされる側、助ける側と助けを待つ側が、一緒に立場になる事はありません。でも医師は河の岸ぎりぎりまで行って対岸に手を伸ばし、そして同じ目線で患者に寄り添うべきなんです。 しかし、近藤さんは河を渡ってしまった。医療側ではなく、患者の不満の代弁者としての存在になったのだと私は考えています。私は河を渡るつもりはないし、渡るなら医者を辞めます。 そうした近藤さんが医療を否定する論を唱えて、世間が支持しているのが現実ですから、医師たちは謙虚に受けとめる必要があります。私自身も含めて、医師の至らなさが、近藤誠現象を生んだのですから。 一方で、カタルシスがあつて分かりやすいからと言って、根拠のない極論を鵜呑みにして不利益を蒙らないよう、患者も賢くなつて欲しい。 医師にも、そして医療否定本にも殺されてはいけないのです」

いいじまいさお 小泉純一郎首相の政務秘書官として、5年5カ月続いた政権を支えた。現在、特命担当の内閣参与、松本歯科大学特命教授などを務める